

道の案内で忍入った判官は頼朝の首を斬るが、実はそれは身替になった金吾であり、頼朝は金吾の服装で現れる。頼朝の死を悲しんで自殺した乙女は頼朝の無事を知って息絶える。九郎も本心は頼朝方であることを明かし、父を縛ることによって父の助命を頼朝に願ふ。

第四(道行、頼朝江島詣)

源頼朝、安達藤九郎盛長

頼朝主従は祐親の陰謀をのがれたのも神佛加護と感謝しつつ、北條を頼んで旅擧するため旅をつづけ遂に江の島の舟渡に着く。

口(江の島の段)

めつた的やの彌作(川原又太郎)、江間小

四郎義時、源頼朝、安達藤九郎盛長、政

子、桂子、三笠(桂子の乳母)、立澤兵次

北條時政の先妻の子、政子と今の繼母の子桂子と乳母とが江の島辨財天に参詣する。頼朝政子を頼まうとするが三笠が連去る。参詣歸りの小四郎を盛長説くが互の心を誤解し、彌作も之に加はり、島居中心に三人争ふが、やがて小四郎の本心わかり、彌作は川原の假の姿であつて北條の心をさぐりに下つたのであつた。これを立聞いた八牧の家来立澤を川原は射殺し、頼朝これに北條の姓を與へる。

切(時政館の段)

北條時政、江間小四郎、牧の御前(時政妻)、政子、桂子、三笠、源頼朝、安達

藤九郎、盛長、文覺下人、猪早太、唐草盛長、頼朝よりの戀の使に來て、政子の文

を持つて歸る。牧の御前は盲目の貨子桂子の見た悪夢を政子に買はせ、母の遺品の鏡を代償に取れば、この鏡の力で桂子の眼が開き、鏡の裏からは大蛇となつて身を隠した時政の先妻の鱗が出る。時政、桂子を頼朝の妻にせんとし、善心に立歸つた牧の御前は悪者三笠を殺す。頼朝は時政の助力を頼みに來る。時政これを引受ける時、文覺上人都から院宣を受けて歸る。

第五、口(入道最後の段)

伊藤入道祐親、萬壽御前、一萬、箱王、

源頼朝、北條時政、江間小四郎、足利又

太郎、猪早太、伊藤九郎祐清

祐親は縛られたまゝ九郎に預けられてゐるが孫の一萬、箱王に繩を解かせ切腹する。九郎は父を頼朝に味方させようと時政達と歸つて來るが萬壽から「親は頼朝に敵對して家名をすゝぐ」との父の遺言を聞いて、頼朝に敵對の決心をする。頼朝かけつけ、九郎の敵對

を悲しむ。

切(夜討の段)

源頼朝、伊東九郎、八牧判官、北條時政頼朝、八牧判官を夜討にして亡ぼし、九郎は自刃する。かくて源氏の代は太平に治まる

豊澤新左衛門師を哭す

豊澤新左衛門は文樂座三月興行の晝の部に「加賀見山」の花見の三味線を弾いたが、その興行中病を得て伊丹市平松町三丁目の自邸に保養中の處、藥石効なく遂に三月二十四日三時五十五分可憐名匠は瀝焉世を辭した、享年實に七十七歳。密葬同廿五日、本葬は同廿九日大阪市西高津中寺町蓮成寺に於て執行された。

因みに新左衛門師匠は日本因會三味線の最長老にして其の位置平配鶴澤道八と伯仲の間にありて共に稻荷座、堀江座に勤続した名人豊澤團平の薫陶指導を受けし事は團平崇拜家豊澤松太郎が生前の物語りに明瞭その他の團平派は僅に朱章をたよりて一二はあらうが直接傳授は蓋し法螺にあらずれば徒に世を僞る者流の空言と聞捨つべきものならん歟。それにつけても師匠の永眠は天壽を全うせるものとは云ひ乍ら哀痛痛哭に堪へず(吾笑)